

立教大学における自校史教育の成果と課題

豊田 雅幸

はじめに

立教大学においては、いわゆる自校史科目として位置づけられるものに、全カリ総合A群「立教科目」のひとつである「立教大学の歴史」と、総合B群「立教学院と戦争」がある。

これらの授業の実践内容については、本誌13号と9号において、それぞれ報告済みである。

そのため、ここでは、先日開催されたシンポジウム、「自校教育の到達点と今後の課題」(2009年1月24日開催)における報告内容と多少重複するが、

改めて立教大学における自校史教育の成果と課題についてまとめてみたい。

自校史科目の開講状況

現在、自校史にかかわる科目は、立教大学におけるアーカイブズセクションである、立教学院史資料センター(以下、資料センター)が担当する形となっている。

これまでの開講状況をまとめると、【表1】のようになる。「立教大学の歴史」という授業自体は、1997年度の寺崎昌男教授(現立教学院調査役)の試みに

【表1】自校史科目開講状況

年度	科目	キャンパス	担当者	開講時期	受講者数
2002	立教大学の歴史	池袋	豊田雅幸(センター学術調査員)	後期・金曜・5限	227
2003	立教大学の歴史	池袋	大島宏(センター学術調査員)	後期・木曜・4限	686
	立教学院と戦争	池袋	老川慶喜(経済学部教授、センター長)ほか7名	後期・水曜・5限	104
2004	立教大学の歴史	池袋	大江満(センター学術調査員)	後期・木曜・5限	100
	立教学院と戦争	池袋	老川慶喜(経済学部教授、センター長)ほか6名	後期・水曜・4限	94
2005	立教大学の歴史	池袋	豊田雅幸(センター学術調査員)	後期・木曜・5限	116
	立教学院と戦争	池袋	老川慶喜(経済学部教授、センター長)ほか7名	後期・木曜・3限	130
2006	立教大学の歴史	池袋	大島宏(センター学術調査員)	後期・木曜・3限	67
	立教学院と戦争	池袋	老川慶喜(経済学部教授、センター長)ほか7名	後期・木曜・3限	108
2007	立教大学の歴史	池袋	豊田雅幸(文学部助教)	後期・金曜・5限	155
	立教大学の歴史	新座	豊田雅幸(文学部助教)	後期・木曜・5限	28
	立教学院と戦争	池袋	奈須恵子(文学部准教授)ほか8名	後期・木曜・3限	127
2008	立教大学の歴史	池袋	豊田雅幸(文学部助教)	後期・金曜・5限	167
	立教大学の歴史	新座	豊田雅幸(文学部助教)	後期・木曜・5限	43
	立教学院と戦争	池袋	奈須恵子(文学部准教授)ほか8名	後期・木曜・3限	138

始まり、2001年度から設けられていたが、2002年度からは資料センターが担当するようになった。2008年度で7年目を迎えたが、この間、2007年度からは、懸案であった新座キャンパスにおける開講も実現し、これまで、延べ1,589名の学生が履修している。

一方、「立教学院と戦争」は、2003年度から開講しているが、こちらは、資料センターの提案によって始められた授業である。資料センターでは、設置当初より、研究プロジェクト「立教学院と戦争に関する基礎的研究」を立ち上げ、戦時下に関する研究に取り組んできたため、その成果を授業に還元させようというのが、そのねらいである。こちらの受講生は、述べ701名である。

教材等の作成

それぞれの授業の構成・内容については、毎年若干の変更を加えつつ、今年度は【表2】【表3】のような構成となっている。

【表2】「立教大学の歴史」2008年度の授業内容

1	オリエンテーション
2	聖公会の日本伝道と創立者ウィリアムズ
3	立教学校の誕生
4	文部省訓令第12号と立教学院の成立
5	高等教育制度の整備と立教大学の誕生
6	関東大震災による被害と復興
7	立教大学の拡大と戦争の影
8	日米開戦とキリスト教主義教育の危機
9	戦局の悪化と大学存続の危機
10	敗戦から学園の再建へ
11	新制立教大学への移行
12	高度経済成長期以降の立教大学
13	まとめ

このうち、「立教大学の歴史」については、筆者を含む資料センターの研究スタッフ3名によって担ってきたが、授業の内容などは、それぞれの専門性を反映させたもので、必ずしも統一されたものではなかった。そこで、授業用のテキストとして、『立教大学の歴史』を2007年1月に刊行した【写真1】。

【写真1】



これまで、立教大学の歴史を概観できる「通史」は、立教学院の最新の年史である『立教学院百二十五年史』ではその刊行が見送られてしまったため、1974年に刊行された『立教学院百年史』に留まっていた。そのため、授業の構成においても、試行錯誤の連続であり、従来の研究成果を踏まえた、立教大学の簡便な「通史」ともいえるこのテキストが作成されたことは、大きな成果

【写真2】



といえる。

一方、「立教学院と戦争」にかかわるものとしては、研究プロジェクトにおける成果をまとめた、『ミッション・スクールと戦争—立教学院のディレンマ』（老川慶喜・前田一男編、東信堂、

2008年3月）がある【写真2】。こちらは、研究論文をまとめたものであるため、テキストとして使用しているわけではないが、各担当者の講義内容のベースとなっているもので、参考図書として活用している。

【表3】「立教学院と戦争」2008年度の授業内容

1	オリエンテーション	奈須恵子（文学部准教授）
2	学院首脳陣におけるキリスト教と国家	西原廉太（文学部教授）
3	近代日本のキリスト教宣教における教育事業	大江満（センター研究員）
4	学院首脳陣ならびに構成員の戦争認識と対応	山田昭次（名誉教授）
5	戦時下の外国ミッション教育の危機	大江満（センター研究員）
6	「基督教主義ニヨル教育」から「皇国ノ道ニヨル教育」へ	大島宏（東海大学課程資格教育センター講師）
7	医学部設置構想と挫折	老川慶喜（経済学部教授）
8	理科専門学校の設定と文学部閉鎖問題	豊田雅幸（文学部助教）
9	立教中学校と戦時動員体制	安達宏昭（東北大学大学院准教授）
10	立教大学における教育と戦争	奈須恵子（文学部准教授）
11	学生生活と戦争	豊田雅幸（文学部助教）
12	立教大学における研究と戦争	永井均（広島市立大学広島平和研究所講師）
13	戦時体制下の立教大学の朝鮮人留学生たちの民族的苦悩と受難	山田昭次（名誉教授）
14	「立教学院と戦争」補遺—戦争が遺したもの—全体のまとめ	豊田雅幸（文学部助教） 奈須恵子（文学部准教授）

授業の継続と充実へ向けて

このように、立教大学における自校史料科目は、資料センターにおける研究活動を基盤としつつ、その成果を積み上げてきた。しかし、こうした取り組みを、いかにして今後も継続していくのか、さらには、その内容の充実をどのようにしてはかっていくのか、という課題も抱えている。

先述したように、「立教大学の歴史」は、資料センターの研究スタッフが担当しているが、任期制の研究職である

ため、授業の継続性という点では、非常に不安定な状況にある。他大学においては、任期のない専任教員が担当する例も見られており、今後も安定的に授業を継続させていくのであれば、こうした問題への対処が不可欠となる。

一方、授業内容の充実という点についても、資料センターの今後の研究成果にかかっているといえる。これまで、戦時下に関する研究を中心として、その成果を二つの授業に反映させることができた。しかしながら、135年という長い歴史を持つ立教においては、ま

だまだ解明すべき課題は多いのである。

おわりに

以上のように、これまでの立教における自校史教育は、資料センターとの密接な関係のもとで展開してきた。今後も、その資源を活用していくことは重要なことである。しかし、他大学の先駆的な取り組みなどを参考に、資料センター以外の資源をも活用するような、新たな授業展開を試みても有効なのではないだろうか。

また、これまでの成果についても、学生だけでなく、教職員や広く一般にも公開するというような試みも、意義あることであろう。

とよだ まさゆき
(本学文学部助教・
立教学院史資料センター研究員)